



TITLE:

# 地理教材としての地形圖(十四)加古川附[近]

AUTHOR(S):

藤田

---

CITATION:

藤田. 地理教材としての地形圖(十四)加古川附[近]. 地球 1925, 4(3): 229-232

ISSUE DATE:

1925-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182995>

RIGHT:

## 地理教材としての地形圖（十四）

### 加古川附近

陸地測量部五萬分一、高砂圖幅

この圖幅は兵庫縣播磨の一角を現はし、主として加古川の下流を示してゐる。圖幅の西南の隅は播磨灘が三角形に出てゐて出入の少い砂濱である、其砂濱は餘り高くないが蜿蜒たる松原低い砂丘の連續で、加古川河口に近く最高五米に達する處がある。すべて中國山脈から流れて出た花崗岩、石英粗面岩などの崩解せる細い砂地であるから海岸黒松の繁茂に適し所々に驚くべき老松が千年の翠を誇つてゐる。明石舞子の海岸の翠松は言はずもがなでこの圖幅中には手枕松、尾上松、高砂相生松、曾根の松といったやうな名木がある、高砂は加古川河口に於ける古代からの要津で、東は攝津兵庫及住吉諸港との交通があり、西は中國九州への渡海地であつ

地理教材としての地形圖（加古川附近）

たからさてこそ謠曲高砂にも謠はれ、平安朝の歌人にも詠せられ、古今集以來の歌枕となつたのであるが、これと共に尾上の松も千載集にのり、手枕松は柳北紀行にのるといふ勢でいづれの地も住吉明神を祭りて海路の平安を祈る所となつた。殊に尾上には古く韓土より舶載の古鐘を藏してゐて上代航運の遺品たるをしめし、曾根は菅公左遷の時こゝによられたといつて天神を祭り曾松の偃松といふ名所になつてゐる、かやうに古代からの航路と砂丘と松と神社と相待つて所謂播州名所なる一帯の風致を海岸につくつてゐるのであるが、眼を轉じて圖幅の陸地を見ると、北緯三十四度四十八分の邊にあたつて東西の方向に著しき斷層破裂線があり、地質圖の第三紀層で出來た丘陵地を南北に二分してゐ

る。この拆裂地の幅は平均十五町内外で山から山の間に平坦な冲積平野をつくり、こゝに美濃川と加古川本流とが西流し、著しく蛇行してゐる。しかるに圖幅の中央部池尻の邊に標高百〇五米の丸い地塊が残つてゐるために、加古川はこの山と氷丘丘陵五十米との間から西南に屈折して加古川町及高砂町の新成デルタを流れることになつた、冲積地は非常に平坦であるから河流は出來得る限り蛇行し且一朝の汎濫も恐ろしいので兩岸の堤防は中々の土工が施してある、河口附近の堤防の如きは四米餘といふ高い置き土がしてあり、國包附近では道路は堤防の上を通じ其高さ十六米も置き上げてあるのである。従つて三角洲の發達も早く、平安朝時代に海岸であつた高砂の松も今は十五町の内陸になつてゐる。

さてかの東西の斷層は、池尻から依然として西について寶殿や曾根驛を通る鐵道及山陽街道の低地をなしてゐるが、よく地形圖を見ると川から北では若い浸蝕の地形を見るが、東の方

の雌岡山は古生層である丈けにコントルの工合が違つてゐるし、池尻山の西の方の高御位山、樋居山及其南一帯の山岳はコントルの調子から見て土地が急峻で地形が變つてゐる、これはこの一帯に石英粗面岩が噴出してゐるためであつて、この岩は又古來建築材として切り出されたと見え、其遺趾として生石村といふ地名もあり又こゝに石寶殿といふ名所をつくつてゐる。生石の西、大鹽村といふのががあるがこれはこのリパライトの崩潰した砂濱で鹽田數百町、東播第一の產鹽地であるのも亦面白い現象と云はねばならぬ。

次にこの加古川拆裂帶低平地の南を見ると、地質圖では第三紀層と記し、一帯の丘陵地平均五十米内外の波狀地である。汽車で明石驛の次の大久保驛からさきにゆくとこの丘陵地の一端を横斷するが、よく見ると砂利層と粘土である第三紀といつても、それは北部とちがつてこの南の一帯は恐らく洪積世の堆積物が其上を被覆してゐるのであらう、洪積世以後徐々に隆起し

たので今日では全く加古川のレベル以上になつて其河水の灌漑をうけることが出来ない。こゝに於てこの丘陵地にはその洪積世の赤土を利用して驚くべく多數の灌漑用溜池をつくつてゐる一見數百の大小無數の池塘それがこの丘陵地の稻田の養水である。これは明石加古兩郡に跨つてゐる現象で、恰も和泉の臺地の上の池塘に類似したもので、或は彼よりも數が多いであらう播州百姓といつて農業に精を出す處で一家少くとも平均七反以上一町二三反迄を耕作するので夏期の勞働の劇しさは近縣に例の少い所である男子は多く神戸大阪姫路等に出稼するので猶更從農人口の數が少なく、よく地圖を見ると田地の多い割合に農家の散布の少ないことがわかるかやうによく働くからかせぐに追付く貧乏なしで、百姓屋の立派なこと農民の風采の美はしいことなど、とても山陰地方の比ではない。

かく池塘の農地の中にあつて、たゞ一ヶ所加古川の養水に灌漑される平地がある。それは實にこの圖幅中の文化の中心たる加古川町の平野

地理教材としての地形圖(加古川附近)

で、山陽本線、播磨鐵道、姫路明石電車といふ交通系統が集中して居、加古川の下流東方、鐵道とかの海岸砂丘の間に存する低地である、丁度この低地の中央に鶴林寺といふ寺があるがこれが名刹であり同時にこの平野開拓の創始者であるといふことが面白い。

鶴林寺は寺傳に聖德太子の創立といふ所で戸田太子堂の名があるが法隆寺資財帳を見ると、

播磨國賀古郡一百町

開田十五町四反  
未開田八十四町六反

講法華經

料と記してあるのがそれで、推古天皇十四年四月十五日、太子が岡本宮で法華經を講ぜられた時、この地で水田百町を給はつたのである、故に寺傳によると太子はこゝで北條郷水岡山の麓荒廉瀬にて加古川の水路を開いて南北二里東西三十町餘の水田を養はしめた、これを五箇井堰といふとあるが、今日でもこの古の五箇の郷、北條、岸南、長田、今福、加古の地が水丘村の水岡山からの疏水に養はれ、水足とか、溝之口などいふ地名をのこして寺傳の偽らざるを證してゐる。然して予の特にこゝに注意したいのは

この法隆寺資財帳の文句で、太子に永田を賞賜されたのは百町とあるが、當時其中で實際十五町四反丈けしか開田がなく、大部分が未開田の葦原であつたといふ事、しかして左様な平野の開拓は無力な人民の力に及ばず、やはり偉大な寺院又は豪族の力と、僧侶のやうな智識を待つて後始めて開墾され得たといふのである。この事に關して予はさきに地球學團岡山支部で岡山平野の開拓が大安寺といふ寺院の力で開拓されたことを併せて講演したのであつたが、同じ例は至る所に多い。賞賜される田地が既に開田であり人民も住んで居るやうな場合には其の庄とか村の名が領地として出て、單にかやうに何々郡何町といふ風に記されてゐないのであるからこの文句は全く未開田で人民の居なかつた地を下さつたのである。

思ふに播州は舊國で天日槍渡來の傳説もあり孝靈天皇の諸皇子は針間を道口となし進みて吉備に入り古事記にも其一皇子日子寤間命者針間之臣之祖也とあつて其の文化に向つた時代は餘

程古いのであるが、それでも推古天皇十四年西紀六世紀頃には加古川の下流で、第三紀の丘陵地と海岸の砂丘一帯の高地との間に新成の低地が出来、それが佛寺の力で漸く開墾されたといふ事實を見逃すことはできぬと思ふ。爾來千四百年今も鶴林寺には尾上の古鐘と同様な朝鮮傳來の古鐘があり音調殷々として永へに悠久の昔を語つてゐるのである。(藤田)

### 大きな月の圖

天文學が進歩し、望遠鏡の力が増すに従ひ天體に關する事柄は發見に次ぐに發見を以てせられるものであるから、天體の圖はいつまでも完成されることはなく唯漸次に正しく詳しきものになつてゆくのである。著しい月の圖が頃日イギリスウエールスのスラネスリ(Slanelly)町のウキルキンス氏に依つて畫かれた、其の大き直徑五ヤード以上に及び便宜上横二十二吋縦三十吋の圖葉にして出版されるといふ。從來あつた月の最大の圖はシュミットが一八七九年に作つたもので直徑七十吋ある。それで今度の月の圖はそれの倍よりも大きい。